

特集・市民と生涯学習④

地域における生涯学習への取り組み

① 住民意識を育てよう
② 社会教育と生涯学習

① 住民意識を育てよう 学習プログラム

中村喜久栄

一 町の風景

京浜急行「生麦駅」下車、徒歩五分、第一京浜（国道15号）沿いに、横浜市生麦地区センター（以下「センター」とよぶ）はある。

お隣りさんが道路を隔てて、障害者地域活動ホーム「ふれあいの家」と、地域福祉を実践学習する良い環境にある。

毎年六月の第一日曜日に疫病除け行事の「蛇も蚊も祭り」や生麦はやし保存会、旧東海道沿

いに「生麦事件碑」と、かつては漁村でにぎわい、現在も魚河岸の朝市は有名で人情豊かな町である。

都心に交通の便も良く、最近ではセンター周辺に高層マンションが建設され、新住民のナウい子連れカップルが目立つ。また、開館当初、老人センターと思ひ込み来館、憤慨し唖呵をきつた威勢のよい、世話好きなお年寄りが大勢いる地域でもある。

一 町の風景

- 二 地区センターは「地域の顔」
- 三 「共生学習」事業
- 四 「人材発掘と育成」事業
- 五 学習とふるさと創生

二 地区センターは「地域の顔」

幼児からお年寄りまでの地域の皆さんが、気軽に利用できるコミュニティ施設として、また、地域活動と交流の拠点として、地区センターは現在市内に三十一館ある。

読書や学習・趣味などのサークル活動、研修会・集会、スポーツ・レクリエーションなど、多目的利用ができる反面、欲張り施設でもある。実際に利用すると各階層に少しずつ不満が残

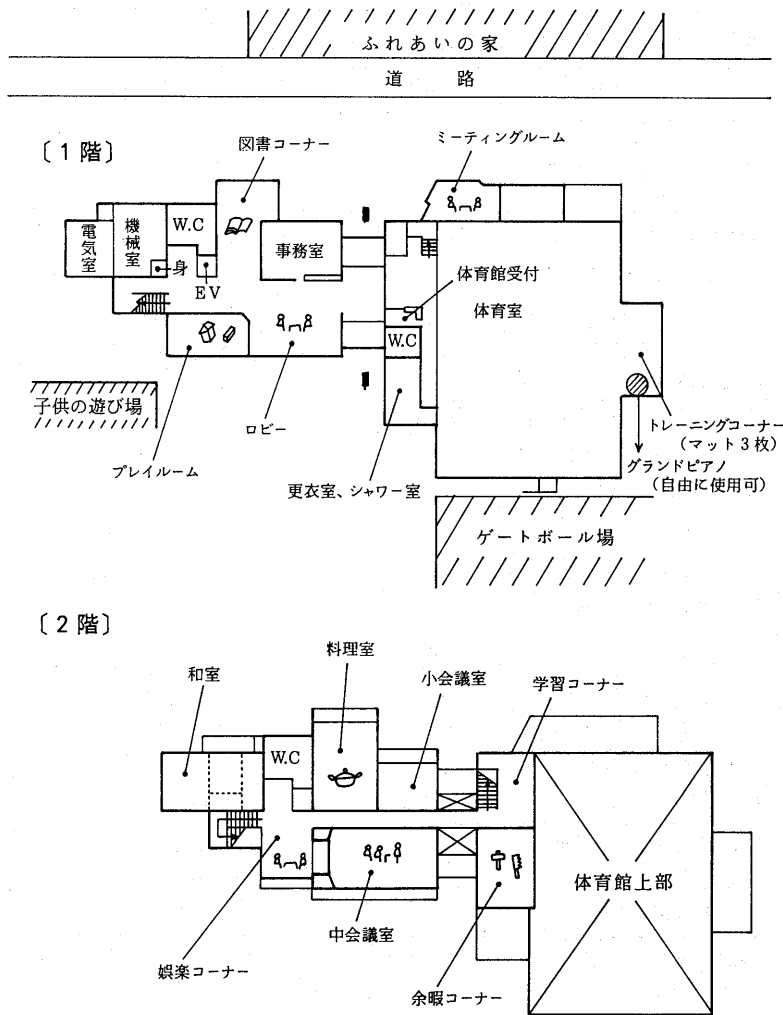
る。地域に開かれた施設は、家庭・地域・学校とが、より身近に、より密着した関係となり、さまざまな地域社会の問題と遭遇することにもなる。

年間入館者数十万二千四百四十四人、一日平均三百四十六人（一九八七年度）。内訳をみると、婦人二九%、小学生三三%と半数を占めている。次に、成人男子一六%、中学生八%と続き、三%が高校生、大学生、勤労青少年である。

一九八二年十二月末にセンターが開館して二カ月、土・日になると一日平均五百人以上の入館者となり、体育館も、図書コーナーも、ロビーも利用者が溢れていた。ふと気が付くと、そこに無気力ではあるが、なかなか世慣れたツツパリ中学生（実際は甘ったれ少年たち）の問題が浮上していた。俺たちが一番必要とした所だと言いたげな得意顔で、春休みと重なり、一日中ロビーにたむろすることとなった。不良のたまり場、センター閉館など、現状を見定めぬい噂が流れた。

センターに派生した問題Ⅱ 地域の問題でもあった。他人事のようにみえても、いつかは自分の問題になりうる。私たちの町のすぐ足元の問題でもあった。一人で抱え込み、責任を感じ、つくろひ隠すことはやめ、実際に見て、知ってもらい、みんなで考えていきたい。この最初に

図一 横浜市生麦地区センター見取図



出会った切実な問題を手掛かりに「身近な人々を巻き込んだ事業」を展開させる学習スタイルが、地域の助け合いネットワークをつくりだした。そして、「問題解決の糸口を求めた事業」の実践学習プログラムは魅力ある協力者たちを浮上させ、今日の学習渡り鳥たちに警告を与えている。

三 「共生学習」事業

日々、小さな努力の積み重ねの中で、小さな夢を描いてみると、センターを拠点にした地域共育力の輪が僅かに見えてくる。

地域の噂は、思いがけなくセンターの存在を、

町の隅々までPRしてくれることとなった。そうした地域のたくさんの人々に助けられ、支えられたプログラム(表1)を紹介したい。

① 身近な人々を巻き込んだプログラム

⑦ センター委員——地域の専門医

センターに問題が起きると、必然的に人の出入りが激しくなる。地域の人々が心配して訪れ、話し合うことになる。センター委員で地域の婦人部長でもある家庭裁判所調停員の情報提供がキッカケで、「すこやか健康」を共同作業で実現した。本音を言えば、当時は事業どころではなかった。私たちは神奈川県保険医協会とコンタクトを取っただけで、地域の婦人部が当日の運営から、地域への呼びかけまで協力してくれた。学習内容(全3回)を、婦人たちの望んでいたテーマに合わせたからでもあった。区内の専門医によるスライド使用の実例をまじえた講演と、毎回終了後の相談コーナーは好評であった。

⑧ 婦人グループ——手打ちうどん

「今日のお料理を試食してください」と、婦人グループが手打ちうどんをもってきた。食品会社とタイアップで、専門講師と材料の粉が無料だという。食べたうどんのおいしかったこと。男性職員でさえ作り方を知りたい、と言った声

表-1 共生学習プログラム

事業名	実施日時	場所	費用	対象
すこやか健康 ・婦人と成人病 ・中高年の食生活 ・すこやかな老い	58年5月(全3回) 午後2時半～3時半	中会議室	無料	成人男女
ジュニア1日クッキング	58年12月より 毎年2回 夏休み・冬休み	料理室	500円	小学5年以上 ～中学生
ジュニアレスリング	59年2月～7月(全24回) 午前10時～12時半 毎週日曜日	体育室	3,000円 (保険料 含む)	小学3年以上 ～中学生
英会話	60年1月～3月(全9回) 午後6時半～8時半 毎週水曜日	中会議室	1,000円	成人男女
生麦地区センター家庭学級 学習主題 みんなでたった1冊しか ない布の絵本をつくって みよう。	60年9月～12月(全7回) 午前10時～12時 毎月第2・第4金曜日	中会議室 余暇コーナー プレイルーム (保育)	500円	幼児(2歳以 上)とお母さん
陶芸	62年1月～2月(全5回) 午前10時～12時 毎週土曜日	余暇コーナー ふれあいの家作業所	1,000円 (材料代 含む)	成人男女
慈善社交ダンス	58年12月より年1回 土曜日 午後6時～8時半	体育室全面	募集額 300円	成人男女
手づくり料理 ・手打ちうどん他	62年1月(全4回) 午前10時～12時半	料理室	1,000円	成人男女

に「手づくり料理」を企画した。地域の婦人グループも、自分たちの企画が取りあげられたことで、使用していたうどんを茹でる大なべ四個を寄付してくれた。メニューも、手打ちうどんの他にピロシキ・ケーキ・パンの全四回で千円の格安で募集。利用者の情報提供と親切な心が結び付いた企画であった。事業費が浮いた分で道具（めん棒とのし台）を購入した。

⑦お隣りさん——障害者作業所

センターのさりげない、お隣りさんとお付き合ひより生まれた企画が「陶芸」であった。障害者地域活動ホームふれあいの家の障害者のホーム長さんと、そこに陶芸指導に来ていた先生に、全面的にお世話になった。全五回の内、素焼釜入れと釉薬（ゆうやく）かけて本焼釜入れの二回、ふれあいの家の作業所を使用させてもらった。ろくろ・電気炉などの道具を借用、材料の粘土・釉薬など、手持ちのものを譲ってもらった。

こうしたことは、障害者のセンター通り抜けて、特権意識と非難した職員の対応から始まったお隣りさん付き合ひであった。ふれあいの家の若者たちは、自分たちが社会の中で自立していくことに懸命で、くじけることなくアタックしてきた。必要に迫られ——映画会のために16ミリ映写機とスクリーンを借り、コピーを取

りに、図書コーナーへ本を読み、クッキーづくりのために車椅子で料理室を団体申し込みに、健常児と障害児の混合保育グループが砂場を使い、タコあげをするために屋外広場を使い、障害児の運動会で体育館を利用するなど。トイレの手伝いをしてくれる人がいず、突然、車椅子で駆け込んでくる。夢中がかかわっている内に、気が付くとセンター職員も変わっていた。年一回、夏のバザーでは、入口を開放し中学校OBのプラスバンド演奏がある。夜間プレイルームでの練習の成果で素晴らしい。年末のおもちつきは、日頃お世話になったと、招待を受けるなど、楽しい持ちつ持たれつのお付き合ひをしている。

⑧友のネットワーク——イギリス女性

「婦人・子ども・老人ばかりが毎日のように利用し、働いている者は税金を払うばかりで利用するチャンスがない。夜間の教室でもあれば参加するのに」との受付での会話が あった。手づくりの布のえほん（館内貸し出ししている）を寄贈してくれる、横浜国際交流ボランティアの会の友人に相談、英会話の講師イギリス女性を紹介してもらった。夫が日本人で三十一歳の彼女は、二歳の娘の手を引いて午後六時半に訪れ、プレイルームで自分の雇った保育者にバトンタッチ、教室に向かった。働く条件は決し

て整ってはいなかったが、このチャンスをのがしたくないと言った。資料も自ら作成、責任ある仕事であった。被害者意識でかわる女性が目立つ今日、ぐずることなく二時間頑張る二歳の娘のしつけには胸を打たれた。ジーンズの若者・高校生・ネクタイ姿のサラリーマンたちが職場から懸命に駆け付けてくる。中国語・書道・鎌倉彫・ギターの夜間事業をその後実施した。

写真-1 「ジュニアレスリング」の練習風景

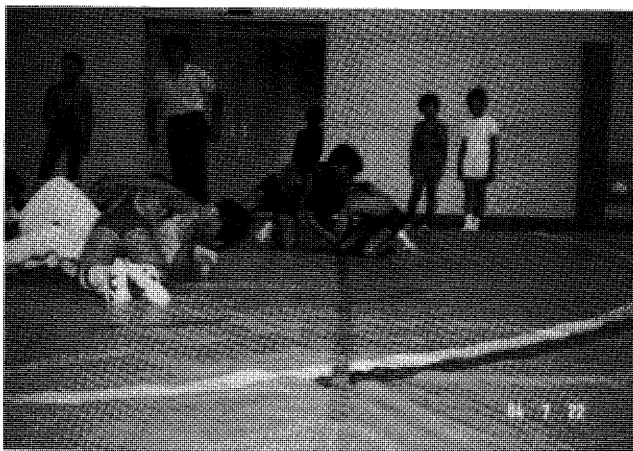


写真-2 「ジュニア1日クッキング」の料理風景



② 問題解決の糸口を求めたプログラム

⑦ 青少年育成——レスリング

元オリンピック選手とコミュニティボラン
ティア(以下「コミボラ」とよぶ)さんの夫(高
校レスリング監督)が訪れ、スポーツを通して
中学生問題に協力したいと、自らのプログラム
持参で現れた。中古の円形シートを寄附、後輩
に呼び掛け指導分担し、謝礼で子どもたちの
シューズを購入してしまうなど、スポーツマン
精神に支えられた「ジュニアレスリング」。保

険加入手続と新たにマットを購入しただけで実
施できた。全二十四回終了後、父母会を持ち、

センターサークル(以下「サークル」とよぶ)

鶴見レスリングクラブとなり、小・中・高校生
(女子もいる)が練習に励んでいる。

⑧ 中学生の声——一日クッキング

毎日センターに集まってくる女子中学生が、
「私たちがって料理室を使いたい。参加できる
ものないジャン」の発言から、年二回の「ジュ
ニア一日クッキング」を企画。夏はサワメ
ニューで、冬はクリスマスケーキ作りと決定。

申込日は本人が来れるように日曜日にした。大
人と違い当日の欠席もあまりなく、最近、男の
子の参加もあり、少しずつ糸口が見てくるよう
である。申し込みの多いときは、即時、講師に
連絡をして、午前と午後の二クラスを実施、全
員を受け入れる。地域のコミュニケーションの
持てる相手だけに、現状に合った対応が素早く
できるのである。

⑨ 学習のチャンス——布のえほん

「センター家庭学級」企画の動機は、コミボ
ラさんOBの自己学習を企画するチャンスをと、
区市民課社会教育係の生涯学級の枠を二つ
もらえたことであった。一年の任期が終わり寂
しく心を残し去っていく姿に、センターを拠点
に再び出会えるプログラムを求めている。OB

に呼び掛けた結果十人が集まり実行委員会を編
成。司会・受付・保育と役割分担し開講した。

内容は二回の話力研究所の講演で、母親の友だ
ち付き合いと、子育て時期の親子のかかわりの
楽しさを学び、よこはま布のえほんグループの
指導により、四回の製作で布のえほんを仕上げ、
最終日に作品を発表した。貴重な作品を手にし
た感動と同時に、福祉の心に触れた学級でも
あった。後に研修を受けホームヘルパーになっ
たコミボラさんがいたり、影響し合えた実践学
習となった。サークル「こつとん」は現在、子
連れお母さんが、年一回の作品展と、毎年、区
民文化祭にも参加。一般開放のプレイルームに
は、布の合同製作コットンランドが寄贈され、
クジラの布のオモチャなどと幼児たちに喜ばれ
ている。

⑩ 魅力ある協力者たち——社交ダンス

当センターだけの問題ではないが、夜間の体
育室を社交ダンスで使用したいと希望者が殺
到。実際に個人利用日は、家族や仲間での卓球
十二台とバトミントン一面とがフル回転する。
団体利用日はこれまた企業のサークル・地域の
団体などスポーツ愛好者でふさがる。バレー・
バスケットを除き、利用人数により体育室を三
等分し利用をお願いする状態であった。問題解
決を求めて、年一回、夜間の体育室を全面開放

し思い切り踊ってもらおうと、委員会では提案された。地域のダンスの先生が二時間の音楽テープを準備、また、一番の問題点であった床を傷付けないためのダンス靴の点検を、センターサークル「さわやか熟年体操」の有志十人が引き受けてくれた。

このサークルは年末のふれあいの家大掃除にも協力している。イヤな役割の靴の点検を、不合格靴にはガムテープを貼り参加可能にするなど、工夫があたたかい。一人募金額三百円(区善意銀行へ寄附)、「慈善社交ダンスパーティー」がスタート(毎年十二月)。ダンス愛好者でもある協力者たちの問題解決にもつながったこの企画は、六年目を終え、寄附金も総額二十三万九千百十四円となり、毎年二百人前後の参加者を得、当日の運営に積極的にかかわる協力者たちの実質的な事業になりつつある。

四 「人材発掘と育成」事業

地域の人々は、いろいろな意味で、自分を生かしたい、役に立ちたいと訪れる。名刺を持って、本人自ら登場したり、電話などさまざまである。自己能力発揮の場を求め、自己PRを兼ねて、チャレンジ精神勇ましく、ある時は颯爽と、ある時は自信もなく不安そうに、しかし、確実に

チャンスを求め目を輝かせて訪れる。

①扉をノックした人々

開館第一号事業の、三教室がそうであった。「老人体操」は、三人の男性指導者が胸を張って当然のごとく現れた。高齢化社会まっただ中に発展し、定期的に健康診断を行い、クリスマス

ス会や町内の運動会で、日頃の成果を発表している。「ジャズダンス」は、三十代の勇敢な女性二人で、経験不足だが勉強させてほしい、頑張ってみせる、とサークル「ジャギーマイツ」をつくり、会員九十八人を指導し、助手も養成中とか。「バトミントン」は、ネクタイ姿の男性が、これはダメだとつぶやいたのがキッカケだった。職場の近くにできたセンターを興味を

表-2 人材発掘と育成プログラム

事業名	実施日時	場所	費用	対象
バトミントン 初心者コース	58年3月～5月(全9回) 毎週(火) 午前10時～12時半	体育室	1,000円	成人男女
料理 ・お母さんのまごころコース ・家族のふれあい味覚コース	58年8月(全3回) 午前10時～12時半	料理室	1,000円	婦人
着付け 初心者コース	・59年2月～3月(全5回) 午後1時～3時 ・61年2月～3月(全5回) ・63年9月～10月(全5回)	和室	500円	婦人
民話と伝説 郷土史を学ぼう	59年5月～11月(全7回) 毎月第2(火) 午後1時半～3時半	小会議室	1,000円	成人男女
おりがみ 紙工作	59年より毎年 夏休み(全2回) 冬休み(全2回)	ミーティング ルーム 余暇コーナー	無料	小学生
おはなし会	60年12月より 毎月第3(土) 午後2時半～3時半	和室 中会議室 プレイルーム	無料	幼児～おとな (幼児保護者 同伴)
親子“おはなし”遊び	・パートI(保育4回) 61年9月～10月(全7回) 午前10時～12時 ・パートII(保育2回) 62年5月～6月(全7回) ・パートIII(保育2回) 63年9月～11月(全7回)	中会議室 余暇コーナー プレイルーム (保育)	1,000円	幼児(2歳以上) とおかあ さん
モラ(MOLA)と 刺しゅう	・パートI 61年11月～1月(全6回) 毎週(水)午前10時～12時 ・パートII 62年5月～6月(全4回)	余暇コーナー	2,000円 (材料 含む)	婦人
中国語 初心者コース	63年3月～5月(全10回) 毎週(土) 午後6時半～8時半	中会議室	1,000円	成人男女
ワンパク・サタデー わくわく工作・手芸	63年10月～3月(全10回) 毎月第1と第4(土) 午後1時半～3時半	余暇コーナー	無料	小・中学生
63才から ゆっくり・たのしく	63年11月～2月(全10回) 毎週(水)午後1時～2時半	体育室 (1/4使用)	500円	63才以上の男 女

持つて見に来ていた電気メーカーの企業戦士で、元国体神奈川県代表候補であった。「ラケットの持ち方・コートの使用がメチャクチャであるから、昼休みに指導にきましょう」が、コートとの出会いであった。会社が休みの火曜日に実施したことで現在も継続している。

地域の主婦が、資格を生かしたいと訪れた。日本和装研修会で学び、未熟だが、場を与えてくれたら普段でも着物が着られる状態にまで指導ができる。一年後「着付けの初心者コース」をスタート。着付けの道具を購入せず、サラシを利用しての指導は好評であった。「なに！あの人が教えてるわけ。ヘエー」と、軽い受け取られ方となった。身近な雑音をよそに、二年に一回の初心者コースも定着。受身で教わることより、積極的に教えることで感謝され、やる気がでて向上心に燃える。コンスタントな実践の場で、人は思いがけない成長を遂げる。名実ともに講師であり、地域に根ざした頼れる人材の誕生であった。

保健婦さんが疲れた顔で訪れた。町内会館を利用してはいるが、二階だったり身障者用のトイレがなく不便だと。エレベーターも車椅子もある、この身近な施設を利用しない法はない。素晴らしい事業をセンターが企画しても、利用する側の発想がなければ、施設は真に生きたこ

表-3 見学してみませんか、センターサークルで友達づくり

No	サークル名	実施日	場所
1	さわやか熟年体操 (55才以上)	毎週金曜日午前10時	体育室
2	ジャギーメイツ (ジャズダンス)	毎週木曜日午前10時	"
3	それいゆクラブ (バドミントン)	毎週火曜日午前10時	"
4	モラの会 (手芸)	第1・3水曜日午前10時	余暇コーナー
5	虹の会 (七宝焼)	第1・3木曜日午前10時	"
6	彩の会 (水彩画)	月3回火曜日午前10時	"
7	二彩会 (水彩画)	月3回火曜日午後1時	"
8	一芯二葉会 (せん茶)	第2・3・4火曜日午前10時	和室
9	一芯二葉会 (せん茶)	第2・3・4火曜日午後1時	"
10	春光会 (華道)	第2・4水曜日	余暇コーナー
11	麦の会 (油絵)	第1・3金曜日午後1時半	"
12	鶴見レスリングクラブ	毎週日曜日午前10時	体育室
13	水彫会 (鎌倉彫)	第1・3水曜日午後6時半	"
14	ニイハオクラブ (中国語)	毎週土曜日午後6時半	小会議室
15	サークルこっこん (布のえほん)	第2・4金曜日午前10時	余暇コーナー
16	鶴友会 (書道)	毎週木曜日午後2時	"
17	ブルトギター (クラシック)	第1・2・4水曜日午後6時半	ブレイルーム
18	中国健康体操クラブ	毎週土曜日午前10時	野外広場
19	ひまわりクッキングサークル	第1水曜日午前10時	料理室
20	サンプラスの会 (モラ手芸)	第2・4水曜日午前10時	余暇コーナー
21	なかよしバンド (家庭学級)	第1・3金曜日午前10時	ブレイルーム
22	ヨコハマ長拳 (中国体操)	第1・3日曜日午前10時	体育室
23	88さくら料理 (料理)	月1回火曜日午前10時	料理室
24	あかしや料理 (料理)	第2水曜日午前10時	"
25	中国語会話 (中国語)	毎週土曜日午後6時半	中会議室
26	翔竜書道会 (書道)	第2・3・4木曜日午後6時	余暇コーナー

とにはならない。待っていた利用者であった。脳卒中で寝たきりにならなくても良いのに、家に、自分の中にこもっていると、寝たきりになってしまふ。車椅子を家族が押し、一人で松葉づえをついて、支えられ歩きながら集まって来る。若い保健婦さんと室内ゲートボールや、輪になって手芸作品と取り組む、毎月一回の「リハビリ体操会の会」の学習風景が実現して五年になる。

「鶴見歴史の会」で出版された鶴見の史跡と伝説の本を図書コーナーに寄贈しますと持参された。「静かな郷土史ブームですね」と話が始まり、「鶴見の民話や伝説にはゆかいなものがあり、例えば、あずきはばあです」。こうして「民話と伝説」が誕生した。

電話で、近くに住む留學生だが中国語を教えたい、と突然言ってきた。電気通信大学院生で土曜日の夜しか時間がないと指定してきた。語

学は毎週一回の実施となる。講師にとっても学ぶ学生にとっても、近いことは最良の条件である。勇気と北京語にすぐ面接となった。気まぐれな生徒に多少あきれながらも、仕事に疲れ滑り込む熱心な生徒に支えられ、ニイハオと続いている。

「平日の体育館、午後の利用度を一カ月間調べた結果、一時二時半の子どもたちが来るまでの間が利用度が少ない。個人利用の時間帯ではあるが、週一回老人体操を企画してほしい」と現れた、なかなか筋の通った内容とデータ持参の強力な登壇者であった。なるほど、午前と午後の利用者が入れ替わった時でもある。超高齢化に向けて六十代後半～七十代を中心にしたプログラムを考慮中でもあり、実施してみることにした。さいわいに、現れた指導者は七十歳をゆうに越しており適任であった。横浜市高齢者体操・レクリエーション推進委員のこの男性は助手として、老人体操・レクリエーション指導者講座卒業生の第一期コミボラさんを連れてきたのである。なんと的確な人選であろうと感心しながら「六十三歳からゆっくり楽しく体操」が始まった。

② 埋れた人材にアタック

⑦ ボランティアグループの底力

このグループとの出会いは、二十年前に遡る。PTA行事の料理に参加したときの指導者が横浜友の会のメンバーであった。そのときの献立は、今も我が家の夕食メニューやお弁当のおかず顔をみせるほどである。センターに勤務して六年。それ以前は家より徒歩五分の施設に二年いた。その頃、彼女たちは利用者としてだけ料理室を利用していた。どうして！身近な！キャリアのある！誠実なボランティア精神の指導者たちがいるのに！区外の料理学校へ依頼するのであろう。一回でも実践の場を提供してあげれば、共同プログラムで費用をかけずに、日常生活に役立つ料理を展開できるものを、と思い続けた過去があった。地域活動十年の実践を土台に、事業を担当する指導員の前に、歳月をかけた小さな確かな積み重ねの実績を持って、彼女たちはかかわってきた。企画段階でも適切なアドバイスと同時に、事業内容を理解してくれ、ジュニアアクキングの際は、規定の講師料で五人のメンバーを配置してくれた。現在、三つの料理サークルを講師三人交代で担当、毎月一回ずつ活動している。

⑧ コミボラさんとミニふるさと創生

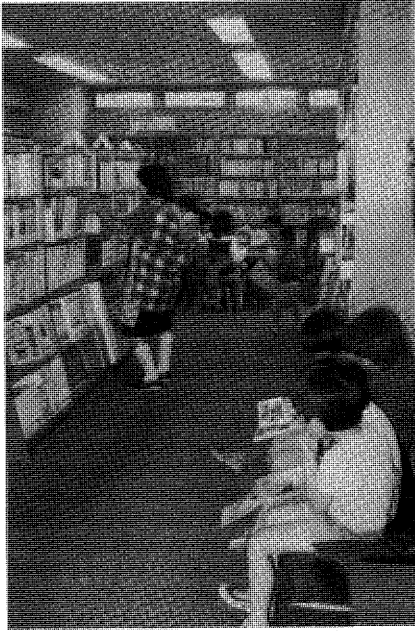
毎年、地域より募集するコミボラさんには、資格や特技をもったPTA・子供会・町内会などの活動経験者で、人間性豊かな人たちが多い。

事業ボスター・館内案内掲示づくりを担当してもらおう。たのしいアイデアとユーモアで心があったかな作品を、言い訳しながら、遠慮がちな見事に完成させる。現役のお母さん（小・中学生のいる）ほど、意欲的で発想もさえている。任期切れを待って交渉したのが「おりがみ・紙工作」であった。当初は、春・夏・冬休み期間に全二回程度で実施、エプロン姿の指導者二人の周りで、牛乳パックのぞうさんができあがる。最近では、横浜市民局青少年課の依頼によるワンパクサタデー事業として、毎月第二と第三の午後にオープン方式で行い、当日の参加を可能にしている。噂を聞いて、他の施設より依頼があり、一日であったが胸を張って指導にかけた。

また、マンションのクリスマスマス会で紙芝居をやるので、紙芝居と舞台を貸して欲しいとやってきた。さりげなく話すその言葉に、センターに勤め始めた頃は、ダイエットとファッションの話ばかりであったと思ひ出し、そのさりげない成長に拍手を送りたくなかった。

毎月第三土曜日の「おはなし会」は、もう四年になる。第二期図書担当のコミボラさんが、本の読み聞かせをやりたいたったことが始まりであった。待ち望んでいた人でもあった。子供会活動で市立図書館の配本制度を受け、玄関

写真-3 図書コーナーの利用風景



先をミニ文庫に、読み聞かせや紙芝居を、また神社社務所を拠点にクリスマス会などをやってきた時代が私にもあった。あのふるさと学習がセンターで可能になる。

当初は四、五人の子どもを相手に、小さな声で、図書コーナーの片隅でやっていた。平行して市のたより等を見て勉強も開始。ある時、区内在住の市立図書館職員の友を連れてきた。一本のロウソクを前に、子どもたちを話の世界に引き込んでいく素晴らしさを目の当たりにしたのである。この友と二人三脚のおはなし会は、子どもの心をとらえて離さない。最近では親子の参加も目立ち人数も増えた。図書コーナーから二階の学習フロアーへ、そこも狭くなり、和室で机を積み上げた手づくり舞台であった。現在

は、中会議室で、購入した移動式折り畳み可能な人形劇舞台で演じている。彼女たちも仲間ができ、グループ「どんぶらこ」を編成。メンバーは謝礼を元に勉強会に参加、子どもたちの目の輝きに答える学習にはげんでいる。地域文化の目覚めであった。ペープサートの指導に問い合わせがある区外でも市外でも飛んでいく。ちっちゃな輪を確実に広げていく。

おはなし会二人のリーダーが「親子おはなし遊び」の指導者であった。若い母親が、一般開放しているプレイルームで、お互いに話もせず、黙々と座って我が子の姿だけを見ている孤独な風景があった。また、おはなし会の二人のリーダーも親との遊びやふれあいに飢えている子どもたちの姿に心を痛めていた。つまり、若い

母親たちが無意識に求めているものと、センターが抱えている問題とが同じであったことになる。肩書きも知名度もない指導者を起用しての初企画に多少の不安があった。それが二十人募集のところ、申込初日の九時開館前に二十人以上の列ができ、そのあとも希望者の問い合わせが殺到、六カ月後にパートIIをスタート。パートIIIは昨年

であった。三回とも同じプログラムと指導者で、親子のふれあいごっこ遊びを通して母親学級を、子育て教育を模索した企画でもあった。とうとう開館前にパートIIIでは三十二人の列となり、先着順で切ることのできない状況がそこにあった。親子で六十四人、いや双子がおり計六十五人。とてもプレイルームでは実施できず、急きょ中会議室に変更となった。保育も最初は二時間であったが、実施している間に一時間半が二、三歳児に無理がないことがわかり、学習時間も合わせることにした。

保育者は五人の人が登録、連絡し本人がダメな場合は友人たちにコンタクトを取ってくれるなど、地域のネットワークを利用させてもらう。条件は子どもが好きであればいい。事前打ち合わせなし、我が子に接した経験を生かして保育してもらっている。変に、責任を感じ過ぎて張り切り、子どもが望まないのにいろんな事をやらせたり、一様に座らせたりするのは良くない。安全に注意を払い、天気の良い日は砂場で、一人遊びのできる子は自由に、母親と離れ不安げな子は抱いて、泣く子はおぶって、納得しないで泣き叫んでいる子は母親に来てもらおうなど、子どもに沿った保育を心がけている。

親子ハート実践学習プログラムにより、そのあと、サークル「なかよしパンダ」をつくり、

月二回、自分たちのプログラムで、親子それぞれの友だちづきあいに花が咲いている。

⑦魅力ある利用者たち

計画性のない行き当たりばったりの企画もあった。書道教室の皆さんが、受付をサヨウナラと通り過ぎていく。アップリケでもない鮮やかな色彩の布製の大きなバックを下げた女性に、あまりの素晴らしさに「それは何ですか!」と、声を掛けてしまった。MOLAというパナマのサンブラス諸島に住むインディオ・クナ族の女性の民族衣裳で、身頃の部分にほどこされた逆アップリケのことだという。自分の作品であり、二、三人に教えているが、根気のいる作業なので一般向きせず、希望者も少ないので事業には難しいと言った。話している内に、受付に人が集まってきて、私と同様に初めて見たと感動している。センターは自己の能力を発揮する場でもある。こんな貴重な手芸指導者の資格をもった人がいるなら、是非、みんなに分け与えてもらおうと「モラと刺しゅう教室」を企画した。モラだけだと飽きるので、変化をつける意味で刺しゅうも一緒にという指導者の要望も受け入れた。募集してみると、先をきそっての申し込みとなり、予想に反し三十分で定員となった。そのあと申し込み者が続き、これも六カ月後パートⅡをスタート。二教室ともサ-

クル「モラの会」「サンブラスの会」と継続、センター五周年記念での合同作品展は、芸術性の高い作品に地域の人々をうならせた。

市長への手紙に、一カ月前の団体申し込みでは、子供会行事の予定がたないと訴えた人が「わくわく工作手芸」の指導者である。見てみると、夏休みになると、地域の小・中学生をゾロゾロ引き連れて、木工道具を使って工作や手芸を教えている。三十代で三人の子の父親で単位子保育成会会長だという。話してみると、若い頃より、青少年センターで影絵を仲間と学び、野外キャンプの経験も豊富で、久しぶりに話の弾む、たくましい実践者との出会いであった。子どもたちを引きつけて離さない指導力をもった得がたい人材に、いつか協力を願おうと、企画をあたためた二年目に実現可能になった。結果ばかりを気にする教育者の建前指導より(言い過ぎました)ずっと、のんびり時間をかけ、共に楽しみながら作品を作っている。評価よりも、過程を大切に、夫が指導、妻が助手をつとめ、五歳の末っ子を長女が図書コーナーで見ている。一応、事前に申し込みをとっているが、当日参加も可能にするため、材料も余分に揃えた、オープン方式のワンパクサタデー事業として現在進行中である。

五——学習とふるさと創生

二十一世紀、超高齢化社会における、地域の福祉の役割は重大である。これからの地域施設における生涯学習の充実と深いかわりを持ち、多様な責任を背負うことになる。

ワンバタンではない、地域性を生かした学習プログラムが必要不可欠となる。知識や教養だけの、受身一方の渡り鳥的学習スタイルではなく、「地域社会を良くして行こう」という住民意識を育てる学習テーマを基本としてである。

幼児からお年寄りまで、そして、障害者と健常者が、共に利用でき共に学ぶことのできる身近な施設は、地域の環境と調和し、個人でも団体・グループでも利用できることで、過ごし方や楽しみ方を自由に選べて、多彩なたまりば的環境をつくりだすことが可能になる。

地域文化を創造しながら、足元の切実な問題とセンター事業を通して取り組む、我が生きざまも土台にしてである。

子育て時期に始まった、私の学習活動は、テーマが「これからどう生きるか!」であった。近所の同年代の子供会・PTAの仲間たちとの婦人学級。また、区内で活躍する魅力ある先輩たちと教育・福祉をテーマに企画した生涯学級。

そして、苦しい時こそ、自己の可能性にチャレンジした。三十二歳で横浜市教育委員会の婦人国内研修五泊六日、札幌・函館。四十歳で横浜市市民局婦人行政推進室第一回婦人問題海外セミナー、アメリカカ十三日間であった。この二度の貴重なチャンスを生かし、自分の生き方を選択してきたと思う。

私は思う。センターに、職場に埋没しては、地域が、自分が見えなくなる。だから、区民会議・地域の婦人団体やグループと、積極的に時間をつくりかかわる。そして、心のゆとりと自己表現を求め、深夜、今年も上野へ出品するF六十号のキャンバスへ向かう。

△横浜市生麦地区センター指導員▽

(注)

- (1) 勤務期間一年、隔月勤務で一日四時間(謝礼二千四百円)交代制。地域より回覧にて募集。受付業務等担当。利用者と身近に接するセンターの顔である。
- (2) センター事業(教室)終了後、継続希望者たちにより世話人(交代制)選出、自主運営願う。一般団体より優先利用できるが、随時、入会希望者を受け入れることを義務づけている。現在、二十二団体ある。